

小川洋子「アンジェリーナ」におけるプロットの修辞学

西田 谷 洋

一 モチーフの両義性と物語制作／解釈の方法

小川洋子「アンジェリーナ 君が忘れた靴」(以下、「アンジェリーナ」と省略する)は、地下鉄のホームでトウシューズを見つけ新聞に広告を載せるとアンジェリーナが訪れ、二度目に手術して踊れるようになったら取りに来ると告げ、以来、「僕」はトウシューズを持ち続けるという物語である。

「アンジェリーナ」は佐野元春の歌詞を冒頭において小川洋子の同タイトル物語群の集成である『アンジェリーナ 佐野元春と10の短編』(角川書店一九九三・四、角川文庫一九九七・一、以下『アンジェリーナ』と省略)収載の物語の一つである。『アンジェリーナ』は男性の「僕」の物語と女性の「わたし」の物語が交互に配列されることから、濱崎由紀子氏は「個々の独立した短編の集合であるにも関わらず、全体としては、〈僕〉の呼びかけに、〈わたし〉が応え、さらにそれに対して、〈僕〉が応えるというさながら往復書簡集のようなつくりになっている」と指摘する。むろん全ての

「僕」／「わたし」が同一人物ではない点で往復書簡ではないが、歌と物語は愛と記憶、欠落といったモチーフとともに響き合っている。

『アンジェリーナ』の特徴として、綾目広治氏は「日常的な世界が描かれていると思っていると、やがて少々奇妙で不思議な世界に入っていくという特質」を挙げ、「偶然性と絡まる人生の或る断面を描き出したかったもの」と指摘している。小川洋子によく見られる「図書室・博物館・標本室・温室といった、日常的な空間とは一線を画した空間」は、『アンジェリーナ』においては主人公の移動だけでなく、何かの到来や想像 によっても現れる。濱崎氏は複数の「僕」に共通するモチーフとして日常に突然、予期せぬ他者が入り込み「僕」をはじめは驚きや不安や苛立ちを覚えるがその奇妙なあり方に惹かれるという「予期せぬものの訪れ」をあげ、複数の「わたし」に共通するモチーフとして「喪失感や欠如の感覚を携え」「多くのものが収集され、分類され、秩序正しく展示される場所」へと赴き「導いてくれる彼らとの出会